

## 平成15年度 幼稚園教育プロジェクト 第3分科会実践研究報告

### 第3分科会テーマ

友だち（同年齢・異年齢）の関わりの中で経験する双方向の内容と育ちを探る

視点1 友だちの気持ちを受けとめ、思いやりをもって接していく心情態度を育むために（H、14～）

視点2 友だちと関わって遊びを創る力を育むために（H、14～）

視点3 幼・小が共有し、共に学びあう活動のあり方を求めて（H、14～）

#### 視点1・2より

平成14年度より、異年齢の子ども同士の間わりがもたらす双方の経験の広がりや深まり、遊びを追求し、工夫する姿に目を向けて研究を続けてきた。

その中で、平成14年11月に全園児が共有する「子どもまつり」の活動を設定し、次のねらいを持って10日間の連続活動として実施した。

- 学級の枠を超えたいろいろな友だちとふれあい、かかわり、喜びや楽しさを共有する。
- それぞれの学年の発達のレベルに応じて遊びの内容と経験を広げ、深めていく。
- 異年齢間の遊びの共有や、遊び文化の伝承をより活性化していく。

その結果、次のような子どもの姿と成果を捉えることができた。

- ・ 「ごっこ」の遊びのイメージとスケールが広がり、独自のアイデアや表現につながっていった。（年長児）
- ・ 異年齢の子ども同士の交流がより広がり、いろいろな場で遊びを共有している姿が見られるようになった。と同時に、遊びの内容が学年を超えて伝播し、下学年においては単に模倣ではなく、自分たちなりに遊び方を工夫する姿が見られ、全学年を通して遊びの内容や経験がより豊かになっていった。
- ・ 「共有する活動」の中で自分のめあてを持ち、それを追求していくことは、一人ひとりの子どもの独自性、主体性、自信を助長していく。やがてその自信は、他者（同年齢・異年齢の友だち）との関わりや接し方において、ゆとりや優しさ、思いやりのある言動につながっていった。

#### 視点3より

平成15年度の実践は、前述の研究をふまえて、異年齢と関わる活動の枠組みを広げ、小学校1年生と4才児を対象として、「共に学び合う活動ー遊び名人になろう」を設定した。このような試みを通して、幼・小の経験と学びを発達的な視点から意味づけていくとともに、子どもの活動の姿を幼・小双方のねらい観点から多面的に捉え、より幅広い視野と視点から考察していくことによって、深い子ども理解に根ざした「幼年期」の教育活動のあり方や方法を探っていきたい。

## I 「幼稚園・小学校の交流活動」の研究のねらい

幼・小の交流活動のねらいの大きな枠組みとして、以下の3つの観点から考えた。

- ① 「幼・小の子ども同士が共有する活動」を通して、幼稚園・小学校の子どもたちの経験や学びを拡げたり深めたりするきっかけをもつ。
- ② 幼児期から小学校低学年までを「幼年期」と捉え、長期の時間的な連続性の中で成長・発達（心的・身体的・社会的・知的）の過程を捉えるとともに、より多面的な視野・視点から個々の発達と変容を探る。
- ③ 幼・小の教師間の連携をより活発化し、幼稚園と小学校における経験や学びの実際の姿を知り合い、話し合うことを通して、幼年期の発達および生活と学びについての理解を深める。

## II 「幼・小が共有し、共に学びあう活動」の構想

- 1、活動名 「遊び名人になろう」
- 2、対象児 幼稚園4歳児・小学校1年生（1-1）
- 3、共通ねらい

幼小の子ども同士が関わり、幼稚園での遊びを一緒にする中で、自分のよさを発揮したり、相手のよさに気付いたりし、互いに親しみや共感を持つ。

### 幼稚園4歳児のねらい

- ・ 1年生と一緒に遊び、いろいろな遊びへの興味関心を広げていく。
- ・ 興味をもった遊びを通して経験や知識を拡げたり深めたりしていく。
- ・ 自分よりも大きいともだちにふれて、一緒に遊ぶ楽しさを味わったり、触発されて自分の遊びを工夫したりしていく。
- ・ 小学校へのあこがれや期待を持つ。

### 小・1年生のねらい

- ・ 幼児期の経験をもとにして、自分のよさ（得意なこと・能力）を発揮する。
- ・ 既存の経験を生かして、新たな発見や気づきや工夫をして遊ぶ。
- ・ 自分よりも小さな友だちに親しみや共感を持ち、相手に分かるように伝えようとしたり、思いやりを持って接していこうとする気持ちや態度を持つ。

遊びの  
共有  
異年齢  
の友だ  
ちとの  
関わり

- \* 子どもの経験の  
互惠性
- \* 教師の経験の  
互惠性

## 4、予想される「共有する遊び」の内容

- ・ 生き物探し（バッタ・小動物）

- ・ 紙ひこうき・紙トンボ作り～飛ばして遊ぶ
- ・ 積み木でのおぼけやしき、おうちごっこ、おみせやさん
- ・ 砂場・築山で土・砂・水を使って遊ぶ（川・海・トンネル・だんごレースなど）
- ・ レストラン・おみせやさんごっこ
- ・ 紙、自然物を使って制作する遊び

## 5、活動の実施に当たって

\*事前に幼稚園児から小学校へ招待状（こんなこととして一緒に遊びたいなあという気持ちを表わす手紙）を送っておく。

\*自分はどんな遊びをやりたいか、それぞれ考えたり決めたり、具体的なイメージやめあてを持たせておく。（幼・小）

\*子どもたちがそれぞれにやりたい遊びを選び、遊び別のグループで自由に取り組む。

## 6、附属幼・小・大学プロジェクトによる協議事項

①小学校「生活科」のねらい観点からの位置付けをする。

②幼稚園・小学校双方のモチベーションの持たせ方を考える。

ex 小学校1年生児童 「自分の得意なことを出し合って、幼稚園の子どもと一緒に楽しく遊ぶ作戦を考えよう」

○幼稚園の生活や遊びを振り返る。（自分の育ちをふりかえる）

○自分の得意なこと、自分にできることを考える。（自分の能力や良さを発見・発揮する）

○自分よりも小さな人とのかかわり方を考える。

○成長の喜びや気づき—自分のこと・相手のこと

③今後少なくとも2～3年間を見通した交流活動の設計をする。

- ・ 今年度は、①10月初旬（10/6～10/10）の週に年中児と1年生の交流活動を設ける。 ②2月に同じペア学級で交流活動を設定する。

・実施日には、幼稚園・小学校教官・プロジェクトメンバーが連携して観察・記録・活動の援助をする。

・幼稚園・小学校との具体案打ち合わせ（9/27）

④事後、「ふり返し」の時間を設定する。

- ・ 子どものふり返し
- ・ 教師のふり返し
- ・ それらをまとめて次回に向けての実践活動のあり方を考える。

Ⅲ 10月6日 幼稚園（4歳児）・小学校（1年生）合同活動「遊び名人になろう」

考察

1、幼稚園児のねらい観点から

①いろいろな遊びへの興味関心を広げていく

- 1年生たちが展開した遊びの中で、4才児にとって初めて経験する遊びがあった。それは、「おにごっこ」「だるまさんがころんだ」「てっぽうやさん」「草花やさん」（紙にはなびらをこすり出して色をつけていく方法）などである。こうした遊びは、4才児にとっては発達の少し難しい面（遊びのルールを理解や技術的に）もあるが、一緒に遊んだ楽しさや経験が、今後の遊びの中に生きてくると思う。今後の遊びの展開を追ってみたい。

②興味をもった遊びを通して経験や知識を広げたり深めたりしていく。

以下に記す「おだんごやさん」「バッタとり」の遊びの記録に見られるように、互いに興味を同じくする遊びを通して空間や場を共にし、その中で互いに相手の言動をしっかりと受け止めながら行動していく姿が捉えられた。

EX1 「おだんごやさん」の中での（小）あかりと（幼）こうたの関わりの中で

あかり「大きくしたかったら、きて、もう一度赤土で・・・」（と赤土をを上からまぶしてみせる）

（幼）こうたはあかりの言うようにやってみる。（初めて自分で）「できた！」と言う。

EX2 「草花やさん」

（小）なみこ「これだったら押し花にできるよ」

（小）なみこ「じゃあまずこれやってみようか、これぎゅ！としてね」二つに折った画用紙に花の汁で描くように押し付ける。

（幼）「あ、できた！」

EX3 「虫捕り」の場面から

① （小）「わりばし、これを立ててトンボを捕るんだよ」と教える。

（幼）「え！これでとれるの？」

（小）「とれるよ」

（幼）「すごーい、じゃあとってみせて！」

数名のグループで熱心に一年生の話を聞き、従っている。

あとで、「赤とんぼつかまえたよ」と（幼）M子が自慢げにまわりの子に見せ

ていた。

- ② 一年生がバッタに似た虫を捕まえて園児に話している。「これはヨシキリと  
いって仲間を食うよ。きっと肉食だよ。」

すると園児が「弱ってるみたいだよ。ねえ、捕まえてカゴにいれる？どうする？  
やめる？」と尋ねる。幼・小の子どもたちは共にしばらく考えているふうだったが、「やっぱりはなすかー」ということになったらしく、草むらに放した。

この3つの場面から、幼稚園児が、1年生の言うことをしっかりと聞き、受け止め、  
驚きや尊敬をもってみつめている心の様子がかがえる。と同時に、虫捕りの記録②  
の場面では、弱っている生きものの生命を守ろうとする心情を共有し、共に考え、判  
断し、行動する姿も捉えることができた。

- ③ 自分よりも大きい友だちにふれて、一緒に遊ぶたのしさを味わったり、触発されて  
自分の遊びを工夫したりしていく。

この観点では、短時間ではあったが、「虫捕り」「おにごっこ」「だるまさんがころ  
んだ」「木のおうちでのごっこ」の遊びの中で「一緒に遊ぶ楽しさ」を味わっている  
姿が捉えられた。

#### EX1<だるまさんがころんだ>

1年生の木島君が、(幼)M子とK子にやりかたを教え、何回かやってみたあと、(小)  
木島君が場を離れていった。その後も(幼)M子とK子は遊びを続けようとしていた  
が、「やっぱりお兄さんがいないとつまらないね」とつぶやいた。

保育者が遊びの中に加わることによって、再び1年生たちが寄り集まり、「だ  
るまさんがころんだ」「インディアンのぼうし」の遊びを始めていった。その中に3人  
の園児が加わる。この遊びの様子から、4才児にとっては初めて経験する遊びで、ル  
ールをわかって「面白い」と感じるころまではいかなかったようだが、それでも鬼  
がタッチされた後、「ストップ！」というまで逃げていくという動作をキャッキヤと  
楽しんでいた。

#### EX2「虫捕り」の様子から③

「殿様こおろぎとトカゲをみつけたー」

と10人くらいの幼・小のチームが一緒になって追いかけている。

一番遠いフェンス(附小側)付近まで一斉に駆けて行き、いっしょに捕ろうとさまざ  
まな方法を小学生たちが思いつくが、虫たちには逃げられてしまった。

「トカゲには逃げられたけど他にいないかな」と言っている(小)下田君。

「あ、いたいた木のところ」といってみんなで集まり始める。(幼)ふうき君(弟)に「おにいさんだからね、つかまえられるんじゃない?」と言われ、兄は触発され木に登り始めた。枝にぶら下がるがどうしてもとれない。

そこへ、「ねー、なにかいるの?」と(幼)けんじ君。恥ずかしがらず、仲間に加わる。(幼)ともき君「みんなで木をければ、こおろぎがつかまえられるんじゃないの?」

と言ったところ、園児、小学生共にやり始める。なかなか捕れないので、「木をゆすったら落ちてくるんじゃないか」と下田君(小)が言い、今度は木をゆすり始めた。木の回りに集まって、虫とりあみを使う子(小)木に登る子、木をゆする子、木を蹴る子など、10人さまざまなやりかたで捕ろうとする。結果的には捕れなかった。残念がっていたが、その後、「他を探そうか」と小学生が言い、新たな意欲に燃えている。

「殿様こおろぎとトカゲを幼・小の子どもたちが一緒に捕まえようとして追っていく場面の中で、双方がこれまでの経験と知恵を出し合い、いろいろな試みをしていく姿がみられた。「触発されて自分の遊びを工夫していく姿」は、製作的な遊びだけではなく、「いかにして生きものを捕まえるか」といったためあてを共有することによっても生まれてくることがわかった。この観点からは、さらに園児たちの以後の遊びの中でどのように出てくるのかを見ていきたい。

#### ④小学校へのあこがれや期待を持つ

今回は、園児対象学年が4才児であるため、小学校への期待はまだ漠然としたものであると思うが、「終わりの会」の中で、保育者が、「また一緒に遊びにきてもらおうね」と言ったことばを受けて、(幼)けんじ君が「こんどは小学校へ遊びに行ったら?」と言っている。小学生と遊びを共にし、親しみを感じたことが、「小学校はどんなところなのだろう」という興味をひきおこしたのではないだろうか?

## 2、小1年生のねらいから

### ①幼児期の経験をもとにして、自分のよさ(得意なこと・能力)を発揮する。

○「幼児期の経験」だけではなく、現在(小学校)の生活経験を加えて遊びを考えたり、選んできた子どもたちもいた。

EX<草花やさん>の記録から

(小)なみこさんは幼稚園に咲いている草花から「この花だったら押し花ができるよ」と、1学期に小学校で学んだことを生かして遊び方を教えている。

- 附幼出身者が対象ではなく、他の保育所、幼稚園の出身者もいることを考慮しなければいけない。つまり、いろいろな生活経験をしてきた子どもたち（経験の違い）が現時点で遊びの発想をしてきている（インディアンの帽子、てじな、てっぼうやさんなど）ことを考慮に入れる必要があった。
- 「自分のよさを発揮する」という点では、それぞれに自分の得意なことを生かし、独自性が発揮できていた。

EX バッタ捕り、だんごづくり、てっぼうやさん、折り紙やさん

（記録後述）

②既存の経験を生かして、新たな発見や気づきや工夫をして遊ぶ。

- 第一回目の約1時間の活動では、十分に遊び込み、新たな工夫をする姿は見られなかった。
- 同じ環境設定の中で、今後も機会を設ければ、違う発想や工夫、多面的な視野からの気づきがでてくることが期待できる。

③自分よりも小さな友だちに親しみや共感を持ち、相手にわかるようにつたえようとして、思いやりを持って接していこうとする気持ちや態度を持つ。

この観点からは、いろいろな場面で、小さいともだちを気遣ったり、思いやりを表わそうとする言動を認めることができた。

EX1 記録<てっぼうやさん>の中でのS君の幼児へのかかわり方（言動）から

（幼）まこ、けんじ、そうすけ、ともおがついていく。

（小）せいじ君「まず順番をきめよう」と言って、「じゃんけんして」と、じゃんけんで順番を決める。

（小）せいは君「そんな近くに行っちゃいけないよ」

「並んで、並んで」一列に並ばせる。

「そうじゃないよ、飛ばし方が違う。こうだよ」

「ほらできた！80点」

など、幼稚園児に対して、優しい口調でいねいに教えようとする。

が、4歳児にとっては、すぐに飛ばし方が修得できず、10：45分頃に分散してしまう。しかしせいじ君はあきらめず、他の子がくるのをじっと待っている。

せいじ君「一回呼んで来よう」「てっぼうやさんしたい人」と呼びかける。

（幼）ただお君が一人くる。

せいじ君はたむ君に教えようとするが、ただお君がすぐにやめてしまったので、一緒に並んで座って図鑑を見ている。

（T）ただおくん、このおにいちゃんの名前はね、せいじくんって言うんだよ。

また一緒にあそぼうね。と声をかける。

「終わりの会」のふり返りの中で、せいじ君は「難しくて（ゴムを当てるのが）お客さんがあんまりこなかった。てっぽうの輪ゴムを飛ばすことを教えたんだけど、（幼稚園の子は）あまり上手にできなかつた」と言っている。このことばから、せいじ君が自分の考えた遊びが幼稚園の子どもにとって難しすぎたということを感じ、十分に楽しませて上げられなかったことをふり返っていることが受け止められた。せいじ君は、幼稚園時代、特定の小集団の中でイニシアチブを発揮して遊ぶ子どもであった。が、一方相手の気持ちを受け止めず、いろいろな手段を通して自分の思いを通そうとする自己中心的な言動を表わしてもいた。S君の幼児期の発達の課題として、「相手の気持ちに立ち止まって受け止めたり考えたり出来るようになる」ということがあげられた。このたびの活動では、せいじ君が当日の活動に入るまでに予め相手が幼稚園児であることを考え、じゃんけんで順番を決めて並ばせるなど、自分の経験や力を十分に発揮しながらも、幼稚園児に目線を合わせていねいに教えようとしている。そうした姿の中に幼稚園児への思いやりやがまん強さ、相手の反応に柔軟に対応していく態度の育ちが見られた。そして、「活動をふり返る時間」では、自分の考えた遊びが相手（幼児）にとってどうであったかを、相手の様子から感じ受け止めていく感受性が表わされている。このような機会（状況）の中でこそ表された心情や態度であったと思う。

また、現在の自分の立場を意識して、「教えよう」とする姿も認められた。

#### EX2 記録<折り紙やさん>の田井君の言動から

(小)の田井君が、折り紙の本を持ってきており、静かな保育室の雰囲気の中でいねいに教えている。

(小) 田井君「できた？ここを切つてまおちゃん(幼)」

(幼) まお 「うん、上手に切るよ」

(幼) まお「それからどうするの？教えて」

(小) 田井君「それからこんなふうに折つて」

まお「むずかしい」「できないよー」

田井君「こうでしょー」と言つて折つて見せる。

まお「えー、またこんなふうに折るの？」

田井君「ここは、きちんと合わせないとだめだよチューリップなんだから。」

(幼) そう君、みおちゃん、あいちゃんたちは、もくもくと熱中して折っている。

(会話記録 藤原T)

#### EX3 記録<どろだんごやさん>の中のあかりちゃん(小)の言動

(小) あかり「始めていい？みおちゃん」「まだつくらないで。集まった？」



「ここに入れてどろだんごやるんだよ。いい?」「はじめるよ。」

「いいよ」

「とどかないひと、どろ集めてあげようか?」「まず、こうやってあつめるの」

「大きくしたかったら、きて、ここ。もう一回赤い土で・・・(上からまぶす)

(幼) こうた君は あかりちゃんの言うようにやってみる。(初めて自分でできた)

こうた「これ持って帰る」

(小) あかり「持って帰っていいけど、ゆっくり持って帰ってね」

\* 年中の様子を見ながら、ペースに合わせた言葉かけをしている。

バツタ採りの記録(P )からは、自分の経験や知識を伝える小学生の姿と、そのことを真剣に受け止めていく幼稚園児の姿が見られた。とともに、生きものへの興味関心を共有して、共に考え、行動していく力強い姿も捉えることが出来た。

以上のような姿は、1年生たちが幼稚園時代と、現在までの小学校生活の中で獲得した経験や知識を蓄積し、自信をもっているからこそ表わされる、幼い人への思いやりであり、教えようとする気持ちの現われであろう。また、同学年同士の中では発揮することが出来にくい力や自分らしさも素直に表わすことが出来た子どもも多かったのではないかと思われる。

次に、小学校「生活科」のねらい観点から、1年生の「活動のふり返り」の内容を分析、抜粋した金山剛志(附属小学校1年1組担任)の考察を記す。

附属幼稚園との交流活動を通して

附属小学校 金山剛志

1年生の子どもたちにとって、年中児(4、5歳)との活動にはどのような意味があったのか、事後の子どもたちの様子や感想などから探ってみる。

〈目的意識・相手意識〉

きょうはねんちゅうさんにいろいろおしえてあげて「クビキリ、キリギリスは、ほかのバツタ(ショウリョウバツタ)をたべちゃうよ」っておしえてあげてよかった。

A

今回の活動について、1年生の子どもたちには「ねんちゅうさんに、いろいろなあそびをおしえてあげよう」というめあてを提示して、活動に取り組んできた。Aは、このめあてのもと、得意な虫取りをしながら、虫の性質などを教えることを意識しながら活動していたことが分かる。

きょうはねんちゅうさんにいろいろおしえてあげたよ。それは、さいしょだんごレースをしたよ。かたそうなだんごでねんちゅうさんところがしたらまけたよ。つよかったよ。

そして、つぎはまわるちきゅうをしたよ。そしてねんちゅうさんをのせてまわしたよ。うれしがっていたよ。たのしかったよ。

B

Bは年中の子どもたちとどろだんごをつくり、一緒にレースをしている。幼稚園児代にやっていたどろだんごづくり取り組む中で、自分が楽しもうという意識よりは「教えてあげよう」という意識が強かったと考える。実際にやる中で、年中の子どもたちがとても上手にどろだんごを作ることができたことに驚きも感じているのではないだろうか。

#### 〈変容〉

まえはどろだんごをつくれなかったのに、きょうはどろだんごをつくれたよ。だからうれしかったけどやめたよ。 C

今回の活動は、幼稚園の頃の自分と今の自分とを比べる活動にもなっていた。Cはどろだんごを作ることで、幼稚園の頃からの変容を自分で気づくことができた。自分の成長に気づき、その伸びを喜ぶことはとても大切なことである。「うれしかったけどやめた」というところは、一緒に遊んでいた子どもたちが別の遊びを始めたからなのか、自分が別の遊びに関心が向いたのか明らかにしたいところである。

#### 〈困ったこと〉

今回の活動において子どもたちは、「ねんちゅうさんにいろいろおしえてあげたい。たくさんあそびたい。」という思いを持っていた。しかし、お店形式にしたことによって、人が集まらなかったり、別の遊びにすぐ移ったりすることでさみしい思いをした子どもたちがいた。ただ、そのことを通して次のように考えた子もいた。

きょう、ねんちゅうさんとあそんだよ。フラフープはふたりきたよ。さびしかったけど、こんどはいっぱいくるようにしたいです。きてくださいね。 D

Dが具体的にどのような方法や作戦を考えているのかはまだ明らかにしていないが、このような思いを持っている子どもがいることを、次回の活動のときには紹介しながら、たくさんの方が来てくれる、いつまでもそのお店で活動してくれるための作戦なども考えてみたい。

#### 〈子どもの暮らし〉

年中の子どもたちとの活動を通して、1年生の子どもたちの暮らし（遊び）には次のような変化が見られた。

- たかおになどのおに遊びをして遊ぶ子どもが増えたこと
- 縄跳び遊びをして楽しむ子どもが増えたこと。

いずれも年中の子どもたちに教えようとしたり、一緒に遊んだりしたものである。これまであまりやらなかったこれらの遊びが、年中の子どもたちとの活動を通して、再び盛り上がりを見せているのであろうと考える。

#### 〈終わりに〉

年中の子どもたちとの活動を1回やったことで、どのような成果が生まれるのかはよく分からないが、子どもたちの中には「もう一度」という思いが芽生えていることは事実である。次回、もし行うのであれば「正月遊び」を一緒に行えたらと考えているところである。（これは、金山個人の考えです。）

#### IV、幼（4才児）小（1年）合同活動「遊び名人になろう」第2次の構想

- 1、期日 平成16年2月10日
- 2、実施場所 附属幼稚園 遊戯室・さくら組・たんぽぽ組
- 3、活動の設定と構想の基盤

前回（第1時—10月6日実施）は、上記の活動名によって、それぞれに得意な遊び・やりたい遊びを選び、小学生が考えてきた遊びの内容別グループ（7グループ）に分かれて活動を共有した。第1時の子どもたちの活動の様子から、次のような姿が特徴として捉えられた。

〈幼稚園児〉

- 小学生の言動を非常に集中して見たり聞いたり、真似てみたりしようとする。
- 自分よりも大きい友だちにふれて、一緒に遊ぶ楽しさを味わったり、いろいろな知識や知恵を吸収しようとする。

〈小学1年生〉

- 自分のよさ（得意なこと、能力）を積極的に発揮しようとする。
- 幼稚園児に対して、リーダー的な言動を表わしていく。（遊び方を教えたり、遊びをリードしていく）
- 幼稚園児に対して、優しさや思いやりのある言動をしようとする。
- 同学年同士の中では、発揮することが出来にくい力や、自分らしさを素直に表すことができる。

第1次の活動から、課題として上げられることは、以下の点である。

- 第1回目（約1時間）の活動では、十分に遊びこみ、新たな遊び方の工夫をする姿が見られなかった。
- 幼稚園児が参加してこない遊びの場があった。（フープ、なわとび）

#### 4、第2時のねらいの設定について

第1時の実態と課題を踏まえて、第2時のねらいとしては、次のことがらを重視する。

- ① 小学生が幼稚園児と「遊んであげる」のではなく、「一緒に遊んだ」という実感が持てるようにする。
- ② 双方の経験として、メリットになるような活動内容を選ぶ。
- ③ 幼・小の子供どうしの関わりを通して

工夫する ←→ 触発し合う



双方の経験を広げたり、深めたりする姿を求める。

## 5、活動の内容

「むかしの遊びをしよう」

- ・ ふくわらい ・ かるた ・ けんだま ・ おてだま ・ おはじき ・ あやとり
- ・ コマ

## 6、本活動のねらい

- いろいろな人（家族・祖父母・異年齢の友だち）と関わって遊ぶ。
- 友だちの良さや、意外性を見つける
  - ・ あの人こんなことができる
  - ・ 見直したり、見方を変えたりする
- 自分の成就感や、成長感を持つ。

## 7、活動内容を通して、子どもに期待する姿（内容別ねらい）一別紙資料参照

## V、第2次の活動の反省と考察

### 1、「共有する 活動内容」としての視点から

本時の活動内容は、すでに1年生たちが十分に経験し、習熟していたこともあって、どの活動も一年生がリーダーシップを発揮しながら幼稚園児に教えたり、一緒に遊びを楽しんでいるという雰囲気であった。

また、2回目の合同活動であることで、双方の親近感も深まり、一年生がじっくりと幼稚園児に関わってくれる様子や、幼稚園児が経験していない遊びにも興味を持って真剣に取り組んでいる様子がいろいろな活動の場面で見られた。

以下、記録・考察を抜粋する。

#### 〈あやとりの場面で〉

**記録** 小1A子「ここはね、こうするの」とていねいに教えている。

幼H子は自分でやってみる。何度も自分でやっては、T（観察者）に見せる。

幼R子は、小A子に「こう？」「どうなるの？」など積極的に聞く。

一つのやりかたを教え終わると、A子は「ほうきのほうがいいかな？」と言い、またていねいに「そうしたら、この3本の指を・・・できたらこれを・・・」と教える。A子幼稚園児の頭をなでながら「ね、できた？」「なにか作りたい物あったらおしえて？」などと声をかける。最初はみんな立ってやっていたが、自然にみんな座る。

**考察** ・一年生の教えようという気持ちと優しいふんいきがあったため、子どもたちも素直に真剣にやっていた。始めは立ってやっていたのだが、だんだん自然に座ってやっている姿も見られ、より落ち着いて出来るふんいきになっていった。

- ・ H子のように出来るようになった喜びから、今度は自分でやってみようという姿がみられた。
- ・ 小A子の「ほうきがいいかな?」「なにか作りたい物があったら教えて」といった幼稚園の子どもたちのことを考えたことばは、幼稚園の子どもたちにとってやさしくされる嬉しさにつながっていったように思う。また、小一年生が幼稚園児の頭を自然になでてやっていた。こういったことも人と関わる喜びにつながっていくように思う。幼稚園の生活の中での異年齢の関わりとは、又違った関わり方であるように感じた。

(記録・考察 平田)

### 〈おてだまの場面から〉

#### 記録・考察

幼稚園児に「玉を投げておいてその間にもう一つの玉を差し替える」という、「お手玉」のやりかたを教えるのは難しかったようである。(小N子さんの反省からもそのことがうかがえる) それでも見よう見まねで取り組む園児たちを「上手上手!」「あ!いまできたよ!!」などと励まし、認めながら遊ぶ姿が見られた。一方では、小学生に認められた年中児たちはより意欲を持ち、真剣に取り組んでいた。(中略)

- ・ 終わりの方では、小学生の案でお手玉を投げて受け止める練習をする姿も見られた。説明をするのは難しいが、「こんなことをしたら年中さんも出来るかも・・・」という気持ちからそのような行動に出たのではないだろうか。しばらくすると、事前の「小学生からの手紙」に書いてあったように「おてだまレース」を始めたが、自分たちが思い描いていた遊び方とはズレがあったようである。しかし、「違う違う」などと否定したり、できないことを責めたりすることは一切なく、目の前の幼稚園児の姿を受け入れ、認めていっていたように思う。
- ・ 小学生の優しさに支えられて、年中児も意欲を持って初めての活動にも取り組むことができたのではないだろうか。

(記録・考察 奥谷)

### 〈カルタの場面から〉

#### 記録・考察

- ・ 小学生一人に対し、たくさんの幼稚園児が集まっていた。カルタは途中から入ることも出来るし、途中でやめることも出来る遊びであるので、気軽に入れ替わりながら遊ぶ姿が見られた。その中で、小学生が年中児たちを受け入れながら、「はい、じゃあ何枚あるか数えて」などと園児をリードしながら遊んでいた。
- ・ 最初は書いてある言葉を読んでいた小学生が、途中からカードについている絵や字を見せて取るという遊び方の変わっていった。字を読めない年中児に合わ

- ・ せた遊び方、自分たちが共有して楽しいと思える遊び方に自然と変化していつているように感じた。

(記録・考察 奥谷)

以上の、活動観察者による記録と考察から、小学生たちが自己の力を発揮しつつも幼稚園児たちの未熟さを受け入れ、優しく包み込むようにして教えたり活動をリードしている様子が明らかに見える。このことによって、幼稚園児たちは、未経験の遊びに取り組み、出来るようになった喜びを味わった子どもも少なくない。

(幼) K児「一年生と一緒にやって、こまを回せるようになった」

(幼) Y児、F児、T児、K児、M児たちは、翌日以降つき組(年長児)の保育室に出向き年長児相手にこま勝負に挑む。昨日の交流の経験から、「上手な人と勝負したい」「うまくなった自信(認めてもらいたい)」という思いをもって、年長児を求めていったのではないか。(相原)

一方、小学生たちは、自分の力を再認識し、「自分の成就感や成長感を持つ」ことにつながったと思う。

## 2、「幼児が追求できる活動」の視点から

今回(2回目)の活動では、「一緒に遊んでもらう」姿から、「自分なりに活動を追求する」幼児の姿を願った。この視点から活動の内容と幼児の取り組みの姿を振り返って見たとき、前述したカルタ、コマ回し、あやとりのように、小学生がいなくても自分たちで続けていき、次第に習熟していった活動内容と、合同活動当日は共有できても、幼児自身が追求できなかった活動内容(けんだま、おはじき、お手玉、ふくわらい)があることがわかった。この視点から、けんだまの活動場面の記録を抜粋し、幼児が自発的に遊びを追求しなかった理由と、教師の取るべき手立てについて考察する。

〈けんだま作りの場面から〉

次頁

〈けんだまつくりの場面から〉

小学生は、Tくんのみ。家で作ってきたけんだまを1個持っている。

(NT=野津)「Tくん、それはどうやって作ったの？」

(小) T「カッターがいるんだけどなー」

NT「Tくん、カッター使えるの？」

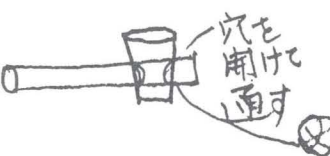
(小) T「ううん、ぼくカッター使えない」

NT「そうか、・・・」(カッターが必要だが、どうしようかなと迷う)

(幼) K児「ハサミで切っても穴をあけられるよ」と言うと、そのことばを受け止めて

(小) Tくんは、ハサミで紙コップの底に穴を開け、周囲を切り開く。

側面の円い穴は、NTがカッターで切り抜く  
側面



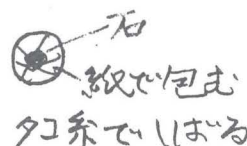
(小) T「玉がいるんだよ。重みをかけないと。」

(幼) R児「重みってなーに？」(小) T「おもりをつけないと」

(幼) R児「じゃ、石でいいじゃん」

(幼) A子「え？石はあぶないよ。顔に当たったら」

(小) T「大丈夫。紙で包むから」



NT「この玉は、何が入ってるの？」

(小) T「石。それを広告紙で包んでから・・・これくらいの石」

(幼) A子「Aちゃんも石拾ってこよう！」

(小) T「石、拾ってきて」と他の子にうながす。

(幼) A子「もう石みつけた」

(小) T「どのくらいい？」と見て、OKらしく、「洗ってかわかさないと」とやさしい口調で言う。

(幼) R児「じゃあ作っといてね」

(幼) H児「ぼくも作っといてね」と石を拾いに行く。

(幼) K児も行く。やがて、石を持って返ってくる。

(小) T「あ、これは・・・」(大きすぎる)

NT[これは、大きすぎて、もし当たったらいたいよね]

(幼) K児再び石を探しに行く。

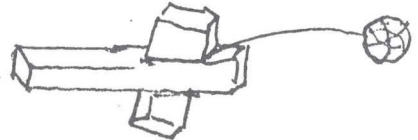
10:40頃やっと、一つのけんだまが完成する。が、それを使って遊ぶ余裕はなく、Tくんは、根気よく次のけんだまの玉を糸で縛ったり、結びつけるのに懸命。幼稚園児は、自力では出来なくて、じっと出来るのを待っている。

NTは、穴を開ける作業を手伝う。

やがて、材料の紙コップがなくなる。NT「困ったなー、何かほかのいい考えはないかな」

というと、(小) T君は「牛乳パックの底を切ったら出来ると思う」と、紙コップの代わりに牛乳パックを使うことを思いついて、図のようにして作る。(幼) H児は、(小) T君が考えた牛乳パックのやりかたをまねて作ろうとする。

ここで、時間切れ(11:00かたづけ)になる。



NT「Tちゃんので、一回やってみせて」

幼稚園児たちは、(小) Tくんがけんだまをやって見せるのをじっと見る。

NT「一緒にやりたかったけど、できなかったね。」

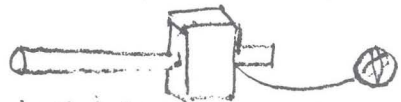
NT (R児に)「あと玉をつけるだけだね」

(幼) R児は、作りかけのけんだまを自分のロッカーにしまい、降園児には大切そうに持ち帰る。

2月12日

I, けんたとしんのすけがけんだまを作り始める。

しんのすけが、円筒に牛乳パックを通す方法を思いつく。NT「おう、いい方法をかんがえたね」と認め、穴をあけるところを手伝って完成させる、が、なかなか玉が入らず、難しく遊びをあきらめてしまう。



たんぼぼ組 と合同で集合し、小学生と一緒に遊んだ遊びの内容をふりかえる。そのときに、しんのすけの考えたけんだま作りの方法を皆に紹介する。そうだが「ぼく、できるよ」といって、みごとに玉を牛乳パックの中に入れて見せる。

けんだまの遊びは、それ以降続かない。

## 考察—2「幼児が追求できる活動」の視点から

### ①保育者の関わり方と活動の展開

約50分の活動時間の中で、当日はどんな姿を願うべきだったか  
指導案の期待する姿では、以下のように記している。

1年生のたなかくんが「やりかたをおしえてあげるよ。なんかいできるかきょうそうしよう」と記している。おそらく自分でつくってくると予想される。何回か教えてもらったり、楽しんだりした後、けんだまつくりの材料を提示してみる。

園児には、自分で作ってみようとする意欲を揺さぶりたい。また、1年生のやりかたを教わりながら、自分でうまく出来るように考えたり工夫したりする姿を期待する。

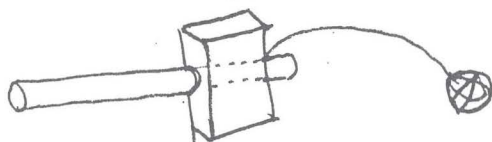
しかし、実際の展開では、NTが初めに「それは(このけんだまは)どうやって作ったの?」と(小) Tくんに聞いたために、実際にけんだまで遊んでみるという初めのステップを



とぼして、作る作業に向かってしまった。つまり、「遊びかたを何回か教えて貰ったり、楽しむ」という過程がなかったために、Tくんにとっては、作ってあげる作業に追われ、幼児にとっては、自分の手におえないけんだまを作ってもらい、出来上がるのを待っている状態になってしまった。この姿は、ねらいから見ると、どちらにとっても「充実感や楽しさが味わえない」という結果になってしまっている。保育者がかけることばの内容、(どんな姿を期待して) その順序 (どんな段階で)、タイミング (適時性) を誤ってしまった結果だと、反省した。

### ① 幼児にとっての「見る」という経験の意味

しんのすけは、当日は自分で作らなかったが、翌日にラップの空き箱と牛乳パックを使って (田中君が後で考えた方法) 作り始めている。その様子を見ていた、Iけんたは、図のように、円筒に牛乳パックを通す方法を考えついた。



このように、その場では取り組む姿が見られなくても、「見た」ことを自分の力でやってみようとする姿が後日に現れたり、見たことを元にして自分の発想・アイデアを持つ姿もある。そして、何かを作るという工程で、単なる試行錯誤でなく、作業の順序性や見通しを持っていく。このような姿を「異年齢との関わりの中での経験や学び」の一つの内容と捉える事ができないだろうか。

### ② なぜ活動が続かなかったか

この視点からは、相原が「ふくわらい、おてだま、けんだまに関しては、ある程度事前に経験させておくほうが遊びのイメージがもてたのではないかと指摘している。

筆者も同様に考えていたが、事後の保育研究時に、大学のプロジェクトの先生から、幼児の発達レベルと遊びの内容との関連について指摘を受けた。例えばけんだまについては、遊び方は知っていても、4才児の手の運動機能の発達レベルとしては遊びに応じていけなかったのではないかと指摘である。けんだまを楽しむためには、柔軟な手の甲の動きが要求される。そのためには、十分に手の運動機能をうながしていく活動を経験させておくことも必要である。また、小学生と共有して楽しむ内容としては高度すぎる活動ではないだろうか。こうした視点から、活動内容の選択についてさらに研究吟味する必要がある。

### 3、異年齢の差がもたらすもの—年齢差の幅の意味

今年度の2回の合同活動を通して、共通していた姿に、1年生の年中児に対する思いやりのある言動や関わりかたが上げられる。これらの心情や言動は、「小学校での6年生との関わりから経験したことがもともになっているのではないか」(小1年生担任 金山T)という考察が出た。つまり、6年生たちに優しく接してもらった経験が年中さんとの接し方につながっているということである。また、2年生は1年生に対して厳しい。1つ学年を跳ぶと、ゆとりが生まれる。6年生だと、1年生をかわいいと感じる。そこに信頼できる関係が生まれてくる。「立場」で育つ面がある。(金山T)

1年生—6年生 教える、伝える

2年生—5年生 力の差が良い作用をする

3年生—4年生 ライバル意識が出て難しい

1年生にとっては、小学校では最年少者として扱われるが、年少者との関わりが精神的な部分での貴重な意味をもつ。

#### EX 小1年生の活動のふりかえりから

- ・ 年中さんの力を「すごいね」(教えてあげてすぐに出来るようになった)と認める気持ちが出ていた。
- ・ 日記から—「でもコマをやる人はなかなかこなかった。そうしたら一人きました。投げ方とか、ひもの巻き方とか教えてあげた。その子は真剣に聞いてくれた。」  
=自分の言うことを相手が真剣に聞いてくれたという経験が貴重
- ・ 「カルタやに年中さんが8人～9人くらいきました。年中さんが字が読めるよとかカルタができるよといったのでびっくりしました。」=年中さんてすごいなという認め=自己の成長の意識
- ・ 「あまり教えてあげられなかったけど、Aちゃんや、Rちゃんたちが教えてあげてよかったです」=友だちの良さを認める

#### □今後の研究の課題について

1、「遊び名人になろう」—2回の合同活動をふりかえって

##### ① 幼・小共通ねらいの観点から

幼・小の子ども同士が関わり、幼稚園での遊びを一緒にする中で、自分のよさを発揮したり、相手のよさに気付いたりし、たがいに親しみや共感を持つ。

○近年、こどもたちの生活や遊び環境の中で、特に異年齢の子ども同士で遊びを共有し、経験や知恵を出し合い、体験を通して互いに学びあっていく空間や場が失

われつつある。そして、子ども同士の身体的な関わりや、体験的な関わりが薄いことが、「人と関わる力」や「自分の思いや考えを表現する力」「遊びを追求する力」の発達を乏しくしている。

- 幼稚園・小学校の低学年においては体験を通して、自分に関わるすべてのものをしっかりと見て、感じ、気づき、受けとめることを大切にすること。そして、それらの体験をもとに、豊かにイメージできること。

また、友だち、他者、集団の関わりの中で、自分らしさを活かす表現ができるようにしていくことが教育の課題として挙げられる。(註)

こうした視点から活動全体のねらいを捉えなおすとき、「幼・小の子ども同士が関わりをもったこと」「遊びを一緒にする中で自分のよさを発揮できたこと」「相手の気持ちやよさに気づいたこと」「互いに親しみや共感をもったこと」「幼稚園の子どもに対する1年生の思いやり」が子どもたちの遊びの姿から認められ、有意義な活動や経験であったと思う。

なお、これらの経験は、1日1時間の中では不十分であることは言うまでも無い。今後も双方の発達にそって、最も自然な形での交流活動のあり方を探っていきたい。

## ② 幼稚園・小学校の交流活動と教師間の連携がもたらすもの

- 活動の計画と実施に当たって、事前に幼・小双方の立場からねらい・活動の展開計画・指導具体案などについての検討会を持った。(大学教官・附属小教諭・附属幼教諭のメンバーが集まり、実施日までに3回設けた)このことを通して、幼稚園教諭側は、小学校「生活科」の内容について学び、幼児期の経験や学びの内容を、幼・小の連続的な枠組みの中で考えるきっかけとなった。また、小学校教諭側からは、幼児期の遊びの中での経験や学びの内容と「生活科」のねらいとのつながりを考えるきっかけとなった。

- 事後、幼・小共同の研修会を持ち、幼・小の子どもが共に展開した活動の中での子どもたちの様子について、幼稚園教諭の捉え方、小学校教諭の捉え方、大学教官の捉え方、それぞれに違う視点や捉え方から、考察したことを照らし合わせた。そのことによって、一人一人の子どもの経験と発達を多面的な視野・視点から捉えなおすことが出来た。双方の教師が現在の子どもの発達の様子について、より幅広い視野から捉えなおし、見方を変えることによって、個々の子どもをより良く理解し、評価していくことができると考える。このことは、即ち一人一人の子どもに自信や存在感を持たせ、今後の「可能性」をより広く開いていくことにつながると思う。

## 2、幼・小合同の研究のありかた

- 幼・小連携の原則＝学びの互惠性
- 幼稚園児からみた学び ————— 小学校から見た学び  
連続性の理論化とプログラム化
- 仮説の設定—体験を通してどういう積み重ねができるのか
- 学びが育っているのかどうかの検証
- 幼・小双方の学びの場をどう作っていくのか  
共有できる活動内容の吟味選定  
追求できる活動内容の吟味選定
- カリキュラム編成上の共通する教育哲学をもつこと  
EX デューイ ピアジェ ビゴツキー などの教育哲学文献の研究  
発達心理学の立場から、アメリカは、イギリスはという国際的な視点からの比較研究

### ○研究会の持ち方について

一日目 幼・小合同活動	基調 提学	2日目 小学校	講演 シンポジウム 等
----------------	----------	------------	----------------

幼稚園カリキュラム                      小学校カリキュラム

「学び」をどう捉え、どう育てようとするのか、  
(以上第3分科会 秦 明德先生からの提言)

## 3、合同研究の課題

○今年度は、幼稚園と小学校の合同活動を幼・小の教師3人（野津・梶原・金山）で連携して企画・構想・事前打ち合わせ・実施し、事後研究（幼稚園全員参加と金山先生）を行った第1年次である。

歩みとしては、「交流」の域を出ない、小さな一歩だったと思うが、実施にあたって一連の過程を幼・小の教師が共有できたこと。そのことによって、双方の子どもの発達や育ちに目を向け、理解の幅を広げることができたことは、大きな成果であったと思う。H16年度以降も、こうした活動を通して、双方の子どもの発達理解とともに、「双方の経験と学びの内容」をいっそう明確にしていきたい。

○活動の考察にあたっては、思いやりや関わりかた、真剣な取り組みの姿など、互いの関わりの中での心情や態度の捉えに終始していて、「経験や学びの内容」についての具体的な考察が乏しかった。今後このことを課題とし、視点として重視していきたい。

○幼・小合同研修会において、小学校側の参加者が、研究主任と活動の該当学級の担任のみであったということは、非常に惜しく、残念であった H16年度は幼・小連携研究組織を確立し、合同研修の輪をさらに広げていくことを目指したい。（文責 野津）

当日の流れ

時間	子どもの動き (☆1年生○年中)	・配慮、支援
8:45 ~9:00	○登園	・先日用意した名札をつけること で、交流への期待を高める。 ・小学生も名札をしていることを 話し、遊びながら「名前を覚え る」というめあてを示し、より親 しく関わられるようにする。
9:30	☆小学校出発 ○遊戯室集合	・小学生が進める様子を集中して 聞く姿が予想される。小学生の話 の中でわかりにくい場面では、幼 稚園の子どもにわかるよう立ち止 まり補足する。
9:40	☆はじめの挨拶	
10:00	☆お店紹介 (技披露) ☆各コーナーへ	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">                     各活動の内容・期待する姿については次項以降に記載                 </div>		
11:05	☆各片づけ	・一緒に遊んだ満足感を共有しな がら促していく。
11:15	☆遊びの振り返り	・幼稚園の子ども→小学生→先生 の順に交流のふりかえりを発表し てもらう。ねらいに迫っていき るように話を向けていく。(相原) 発表T・野津T・岡崎T・園長T 金山T
11:30	☆終わりの挨拶 ☆小学校へ帰る ○降園準備・降園	・一緒に遊んだ幼・小の友だちと 握手でお別れする。

活動内容を通して幼稚園の子どもに期待する姿

活動内容	期待する姿
コマ	<p>コマ遊びは2学期の様式学級わかば組との交流会でも経験して いる。この時はまだ幼稚園の子どもはコマに触れたことが無く、一 生懸命教えてもらうものの、幼稚園の子どもにとっても十分に遊び れない活動になってしまった。1月よりひもゴマに触れ挑戦してい る子どもも多く、回すだけでなく机の上を狙ったり綱渡りに挑戦し たりしている姿があるので、本時の活動は幼稚園の子ども、小学1 年生共に「コマ回し」という遊びの面白さを共有することがねらえ ると考えている。</p> <p>1年生の手紙から感じ取れる思いとして、①コマの回し方 (い ろいろな) を教えてあげたい②一緒に勝負して遊びたいという2つ の思いがある。幼稚園の子どものこれまでの経験に合わせて、①コ マの回し方を教えてもらう②一緒にコマをいろいろな回し方で楽し むという2つの活動(姿)が同じ場の中でこっちゃんになっとなってしま ないように、1年生の思いを支えながらある程度整理して活動が持 てるように支えていきたい。</p> <p>また、上手にコマを回す1年生の姿に憧れたり、いろいろな技を 見せてもらうことで遊びのめあてをもちたりできたりするような経験と なるよう支えていきたい。</p>
あやとり	<p>あやとりは祖父母参観の時にひもを用意していたが、ほとんど 経験が無い様子だった。1年生は15人があやとりの活動をする ということで、かなり経験の差があると思われる。2歳離れた縦 の異年齢間での「むかし遊び」の伝承であることから、膝をつき 合わせて手を取って関わっていく姿や、やさしく教えてもらった 暖かい気持ち、出来るようになっていく姿や、やさしく教えてもらっ た。</p>
おはじき	<p>おはじきも祖父母参観の時に用意していたが、ほとんど経験が 無い様子だった。あやとり同様、2歳離れた縦の異年齢間での 「むかし遊び」の伝承であることから、膝をつき合わせて手 取って関わっていく姿や、やさしく教えてもらった暖かい気持 ち、おはじき遊びの面白さに共感していきたい。</p> <p>おはじきは1年生は担当が1人であり、幼稚園の子どもの人 数によってはわかるように遊びを伝えていくことが難しいこと が予想される。1年生の思いが幼稚園の子どもにも伝わるよう 配慮していきたい。</p>

活動内容を通して幼稚園の子どもに期待する姿

活動内容	期待する姿
ふくわらい	<p>1年生のたさかさんが「いっしょに作ったりするつもりだよ」と手紙に記している。この気持ちを生かして、ふくわらいをデザインし、一緒に作る場所から始めていかせたい。幼稚園の子どもへの参加が多い場合は遊びの面白さを味わった後で、簡単な顔のふくわらいをつくってみることをうながしてみる。そのサポートをある程度1年生に任せ、どのようにしていくのかを見守っていく。園児には、自分たちで考えて作る遊びの面白さを味わって欲しい。</p>
けんだま	<p>1年生のたなかくんが「やりかたをおしえてあげるよ。なんかいできるかきょうそうしよう」と記している。おそらく自分でつくってくると予想される。何回か教えてもらったり、楽しんだりした後、けんだまつくりの材料を提示してみる。</p> <p>園児には、自分で作ってみようとする意欲を揺さぶりたい。また、1年生のやりかたを教わりながら、自分でうまく出来るように考えたり工夫したりする姿を期待する。</p>
かるた	<p>1年生のふじはらさんが、かるたを用意してきて遊びをリードしていくと予想される。現在4才児の大半が文字に興味を持ち、少しずつ文字を覚えたり、すでに全部読めるようになっている子どももいるので、遊びの展開は全面的に子どもたちに任せる。男女誰とでも一緒に遊ぶ、広い関わりの中で、同時に取った場合や「おてつき一回休み」などの簡単なルールを受け入れて遊ぶ気持ちを持たせていく。</p>
おてだま	<p>1年生のむらかみさんが「おてだまれ一すをする」と記している。どんな遊び方をどのように教えていくのか、展開のしかたを見守る。幼稚園児は初めて触れる子どもも多いだろう。また、技術的にも難しさが予想される。「なわとびや跳び箱のように、れんしゅうすれば出来るようになるよ」という気持ちと「むかしの遊び」への興味を持って取り組んでほしい。</p>